

## 優秀賞『わたしを離さないで』

庄治 瑞季

ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロの作品である「わたしを離さないで」、この「わたしを離さないで」という言葉にどんな意味がこめられているのか考えながらこの本を読んだ。

この本は、一九九〇年代末のイギリスが舞台となっており、「キャシー・H」という人物の語りのような形で物語が展開される。この物語の中では、「提供」をするための、クローン人間がでてくる。クローン人間の物語とも言える。

「キャシー・H」、「ルース」、「トミー」の3人がこの物語で中心となる人物だ。この3人はクローン人間で、小さいころは「ヘールシャム」というところで育った。そこでの生活は、将来「提供者」となるための生活である。つまり、体に害を加えることはしてはいけないのだ。「喫煙」に対して文中に「わたしにとっても悪いことだけれど、あなた方にとってはもっとずっと悪いことなの」と「ルーシー先生」が言った場面がある。それほど「ヘールシャム」の子どもたちは体を気遣わなければならなかったのだ。

このような世界観に、最初は衝撃をうけた。「臓器提供」をするために生まれた人たちが中心となる話だったからだ。また、現在の世の中では考えられないからだ。

しかし、こういうことが現実になるのではないか、もし現実になったら、などのことを考えさせられた。

もし、「臓器提供」をするためだけに生まれ、私たちとは違う環境で育ち、大人になっても自由に生きられない人が現実にいたらどう思うだろうか。もし、自分がそのような人から「臓器提供」をされたらどう思うだろうか。

今の私は、そのような人のことをかわいそうだと思い、感謝するだろう。誰でも、そう感じるのではないかと思う。

それならば、本当に、「わたしを離さないで」という本の中の世界になることに対してどう思うだろうか。

私は、そのような世界になることに対して反対だ。なぜなら、せっかく生まれてきても、

健康なのに「臓器提供」をしなければいけないというのは、おかしいことだと考えるからだ。そもそもクローン人間という存在をつくりだすことにも疑問を感じる。

たしかに、クローン人間がいて、その人たちが「臓器提供」をしてくれることによって助かったり、元気になったりする人がいるという面では良いことなのかもしれない。

しかし、クローン人間をつくりだすことに疑問はあるが、クローン人間だとしても生きています。その生きている人を殺すような行為をすることはおかしいことだ。

健康に生きている人から臓器をもらう人は素直によろこべるのだろうか。よろこべないだろうと、私は考える。これらのことから、私はこの本のような世界になることに対して反対である。

ここまで、この本の世界に対して否定的な意見を述べた。だからといってこの本が悪い本なのではない。むしろ、とても良い本だと思う。

なぜなら、この本を読むことで、現実をみているだけでは想像もできないこと、もしかしたら未来はこんな世界になるのかなど、考えることができたからだ。

私も、この本を読むまで、クローン人間のいる世界など想像したこともなかった。しかし、読んだあとは、クローン人間のいる世界を想像することもでき、そのような世界についても考えることができた。

冒頭で、「わたしを離さないで」という言葉にどんな意味がこめられているのか考えながら読んだと述べた。そのことについて、私なりに解釈することができた。

この言葉は、本の中では歌詞としてでてくる。「ネバーレットミーゴーオー、ベイビー、ベイビー、わたしを離さないで」という歌詞だ。「キャシー・H」はこの曲になぜか惹かれたと書かれていた。

それは、「わたしを離さないで」という言葉に、わたしを忘れてほしくない、そのような意味があるからなのではないかと考えた。それだけではなく、自分の運命などに、反抗心が多少あったのではないかと思う。

このことから推測できるように、「ヘールシャム」の子どもたちを含む、クローン人間の運命は、彼らにとって残酷だったのだろう。その運命を悲観しているから「わたしを離さ

ないで」という言葉があるのだろう。そしてその言葉には、わたしを忘れてほしくない、運命を受け入れたくないなどの意味がこめられているのだろう。

「わたしを離さないで」は、題名の意味まで考えさせられる、本当に良い本で、一回は読むべきだと思う。